

幼児教育の変革を目指して

もう一つ、幼児教育における石井式の普及を後押しする、こんな出来事がありました。

世界的な月刊誌、リーダーズ・ダイジェスト社の方が、その頃アメリカで流行していた学習機器を携えて「何か、うまい使い道はないものか」と相談に見えたのです。その学習機器とは、発声テープを付けたカードを機器に通すと、機器がそのカードに書かれた単語などを読んでくれるというもので、見た瞬間、「これは行ける」と思いました。

記憶の原理は“関心”と“反復”の二つです。とりわけ学習に大切な“反復”は、幼児は大好きなのに、教える側の教師や親にとっては大の苦手です。ところが、これを使えば、くり返しが大好きな幼児のこと、飽きることもなく反復して、ひとりで漢字を覚えてしまうに違いない、と考えたのです。

この機器は、訪問販売という形で発売され、大好評を博しました。北は北海道から南は沖縄まで、各地で普及のための講演会が開催され、私は東奔西走することになりましたが、会場の多くが幼稚園であったため、実践幼稚園、保育園が急速に増えていったのです。

とはいえ、「幼児を預かって、ただ遊ばせておけばよい」という園も多い中で、あえて漢字教育をやってみようと決断するのには、かなりの勇気が要るようです。

現在、熱心に石井式を実践しているほとんどの園も、決してすんなりと漢字教育への取り組みがはしまったわけではありません。

ある年配の園長さんは、何回も私の講演を聴き、私の著書を何度もくり返して読んだそうです。しかし「信じられないというよりも信じたくな

かった」と言います。この教育が正しいとすれば、今まで自分がやってきた数十年が空しかったことになるからです。

それでも、悩みに悩んだ末、ついに実践幼稚園を見学してみて「子どもたちのために一日も早くこの教育を採用しなければ」と、その場で決心されたそうです。

また、別のある園長さんはこう言っています。「最初、先生方は皆強硬に反対したが、私は半ば強制的にやってもらった。すると彼女たちの予想に反して子どもたちが漢字をどんどんと覚え、まず子どもたちの態度が変わる。教師の指示に注意深く反応する。理解が早い。だから、それまで消極的だった指導が、子どもの反応のよさに引かれて積極的になり、先生方の顔色も変わってくるのです」と。

ひと頃、流行語にもなった「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という言葉は、日本人の特性をひじょうによく表した言葉だと思いますが、これは裏を返せば「青信号でも、ひとりで渡るのは怖い」ということに他なりません。どれほど子どもにとって有益な教育であるかがわかっていても、周囲の園を見回して、やっていなければホッと胸を撫で下ろす、という園のほうはまだ多数派なのです。

現在、石井式を実践している幼稚園、保育園がおよそ 700 園ほどにのぼりますが、これも全体からすれば、100 園のうち一園か二園かという程度にすぎません。「多くの子どもたちが、かけがえのない幼児期を無為に過ごしている」と思うと、いたたまれない気持ちがありますが、教育関係者やお母さん方の中に、ひとりまたひとりと、石井式漢字教育の理解者を増やしていくことで、いつしか時代も大きく変わっていくはずです。私は、その日の来ることを期して、これからも人々に呼び掛けていこうと思っています。